

四日市大学 ピックアップ・トピックス

2009 年秋号 <2009 年 10 月 1 日発行> vol. 7

【発行】四日市大学 入試広報室

〒512-8512

三重県四日市市萱生町 1200

電話 059-365-6711

FAX 059-365-6630

URL <http://www.yokkaichi-u.ac.jp/>

E-mail nyushi@yokkaichi-u.ac.jp

- ・竹鶏物語ー3R プロジェクトー
- ・卒業生カンヌに咲く

P.1

- ・四日市流域ルネッサンス「キックオフ・フォーラム」開催
- ・合同ゼミによる尾鷲市のまちづくり視察研修
- ・「日本の政治の行方～総選挙の結果を読む」
- ・「地方議会論」始まる

P.2

- ・関孝和数学研究所
- ・地域の小学校へ理科教室実施
- ・四日市市役所職員による集中講義
- ・地球の命つないでいこう in 四日市

P.3

- ・サマースクール
- ・ひらめき☆ときめきサイエンス
- ・全日本ソフトテニス総合選手権大会ペア優勝

P.4

竹鶏物語ー3R プロジェクトー

平成 21 年度環境省「循環型社会地域支援事業」に選ばれる

本学の環境情報学部にて拠点を持つ四日市大学エネルギー環境教育研究会が、環境省の平成 21 年度「循環型社会地域支援事業」に提案した「竹鶏物語ー3R プロジェクト」が実証事業として採択された。総応募件数は 54 件で、採択件数 7 件という高倍率を勝ち抜いたものである。

プロジェクトの内容は、間伐等で不要になった竹を微粉碎し、それに地元企業の保有する特殊な細菌(アライ菌)を混ぜて発酵させて飼料を作ったり、堆肥として活用したりするもの。3R(Reduce、Reuse、Recycle)を実現化するこのプロジェクトを事業化することで、不要な竹や廃棄有機物の再利用、鶏糞の堆肥利用、竹鶏の卵を使った新しいビジネスの展開などが可能になり、地元で循環型社会のしくみを創出できると考えられる。

本年 6 月末に着手されたプロジェクトでは、すでに試験的な卵の生産も始まっている。同年 8 月 21 日に中間評価会議が実施され、研究会メンバーのほか主婦を含む評価委員の方々や養鶏場経営者、四日市市職員などが参加して卵の試食をした。黄身がしっかりと盛上がり、匂いや臭みがないのでケーキ作りに良い、アレルギー体質の子供が食べても大丈夫だった等々、味や品質に厳しい主婦の皆さんや、プロの調理師、シェフなどから絶賛を浴びた。

なお、環境情報学部 4 年の田代慶光君が卒業研究のテーマとして取り組んでおり、プロジェクトの中核を担っている。

プロジェクトは平成 22 年 3 月末に終了予定で、結果は同年度の環境省「環境・循環型社会白書」に掲載される予定。

また、本プロジェクトの成果は、地元で実際に事業化される可能性も高い。



卒業生カンヌ国際広告祭で受賞



環境情報学部第 1 期生で、電子出版セミナーの卒業生渡辺創さんが関わった広告作品が、カンヌ国際広告祭のデザイン部門で金賞、プロモーション部門で銅賞という快挙を達成した。

作品は所属するピラミッドフィルムクアドラと博報堂との共同作品で、NHK が毎年開催しているデジタル・アート・フェスティバルのプロモーションも兼ねて制作されたアート作品「COTO-TAMA」である。渡辺さんは制作チームのプロダクションマネージャーとして参加、特に映像・イベント部分を担当した。

四日市流域ルネッサンス「キックオフ・フォーラム」開催

2009年7月25日、四日市流域ルネッサンスのキックオフ・フォーラムが開催された。これは、四日市大学の教授らで構成する「四日市大学研究機構」が市民とネットワークを結び、人・自然・文化・経済など、さまざまな角度から四日市の持続可能な成長を探るもので、市民を含む100名以上が参加した。

田中俊行四日市市長の挨拶に続き、四日市大学研究機構長の新田義孝教授がキックオフ宣言。続いて、吉村壽夫教授による基調講演「生き甲斐・夢・希望」があり、芸術やスポーツは人々の夢と希望を実現するものだという熱いメッセージとともに、三重県北勢地域の文化芸術・史跡の紹介や教授の文化芸術活動との関わりについての解説があった。

パネル討論には本学教員（田中正明教授、岡良浩准教授、鶴田利恵准教授）と保黒理事長（四日市大学自然環境教育研究会）、環境情報学部4年生の田代慶光君とが参加した。「四日市にとって持続可能な成長とは何か」をテーマに会場からも、地域の将来について様々な発言があり、皆で協力して持続可能な社会を築いてゆこうということで幕を閉じた。フォーラムは、今年度中にあと3回開催予定である。

合同ゼミによるまちづくり視察研修

2009年8月に三重県尾鷲市で、9月に沖縄県で、総合政策学部の岩崎恭典ゼミ、小林慶太郎ゼミが、合同で視察研修を実施した。尾鷲市では、新たな観光資源として注目されているシーカヤックの体験や尾鷲漁港と県立熊野古道センター見学、古民家レストラン「夢古道おわせ」でランチを提供しているNPO法人天満浦百人会の方たちへの、ヒアリング調査を行った。また、沖縄では、岩崎ゼミの卒業生も参加しているウークイ(沖縄の旧盆の最終日)の晩のエイサーを見学したり、ヌチグスイ(命の薬)とも言われる沖縄の食に舌鼓を打ちつつカチャーシーを踊ったり、沖縄の文化も体験することができた。普段なかなかできない体験に、学生達も、強い刺激を受けたようであった。



「日本の政治の行方～総選挙の結果を読む」

2009年9月5日、総合政策学部では、公開講座「日本の政治の行方～総選挙の結果を読む～」を開催した。民主党が政権交代を実現した総選挙に合わせて、今後の日本の政治の行方を考察するための公開講座。講師には毎日新聞社顧問の長崎和夫氏をお招きした。

長崎氏は一貫して政治畑を歩み、論説委員長も務めた長崎氏の日本の政治の表も裏も知り尽くしたベテランジャーナリストだ。舌鋒鋭い話に聴講者は、引き込まれるように聞き入っていた。

「地方議会論」始まる

2009年8月4日から6日、総合政策学部では、集中講義「地方議会論」を開催。地方議会のしくみや議員や議会の取組みを知ることで、議会を身近に感じ、地方政治への関心を高めることを目指して三重県議や四日市市議を講師に招いて開催した。また、講座は一般の市民にも開講。

初日は「市民と議会」をテーマに、「地方議会の議員になること」「市民と議会とのつながり」という内容で、三重県議会及び四日市市議会の議員と受講者との活発な意見交換が行われた。2日目は「議会改革」、3日目は「活躍する議会」がテーマで、いずれの日も大盛況。講義内容について「考えられないほど価値がある」との県外議員からの発言もあり、毎年恒例行事として、今後は市外、県外にも広く呼びかけて開催していきたいと考えている。

関孝和数学研究所

2009年4月に開設した関孝和数学研究所は数学・数学史・数学教育の研究や、外国への教育支援などを旨とする研究所で、高校生をはじめとして一般の方にも広く開かれている。

その事業の一環として、関孝和数学研究所オープンハウス事業を行い、桜井進氏(サイエンス・ナビゲーター)による「ジョン・ネイピア対数誕生物語」が、四日市大学のスタジオで講演された。

講演会には約80名の聴講者が集まり、対数を発明したネイピアの感動の歴史が紹介され、数学が長い間の人々の苦闘の末に発展してきたことが画像とともに紹介された。聴講者からは「大変素晴らしかった」という声が聞かれ、最後には盛大な拍手が続いた。

また、9月19日・20日の開所記念講演会では、鳴海風氏(小説家)による「関孝和を巡って」、小川東教授による「円周率とその歴史」が講演された。関孝和数学研究所では、今後もさまざまな取り組みが計画されている。

※関孝和数学研究所への問い合わせ先、skim@yokkaichi-u.ac.jp。



地域の小学校で理科教室実施

2009年8月20日、環境情報学部の学生6名が四日市市内部地区市民センターにて小学1年生から5年生の36人に対して理科教育を実施した。これは四日市市からの受託事業で、主催は四日市大学環境教育研究会。環境情報学部の新田義孝教授の指導で、子供たちに電気を理解してもらおうと、当日は「クルクルモーター」を作成した。学生達は、静電気発見の歴史や電池の発明の後、静電気の実験や10円玉と1円玉を使った発電実験、続いて「クルクルモーター」の制作にとりかかった。

「クルクルモーター」は、消しゴムの上にクリップで支えた手巻きコイルが回る電気を使ったおもちゃ。学生達の丁寧な指導により、子供たちは「クルクルモーター」を作り上げ、モーターが文字通りクルクル回るのを見て感激していた。

名古屋国税局管理官が講演授業

2009年7月1日、経済学部では、名古屋国税局酒税監理官杉本徳男氏を招いて、税務会計論の授業(「都市計画論」と「国際経済論」との合同授業)で講義を行った。学生に、実務経験豊かな専門家の生の声を聞くことで、税を身近に考えるきっかけにってもらおうと企画したもので、津税務署の協力のもとに実現し、経済学部の学生を中心に約70人が受講した。

杉本氏は、40年にわたる税務畑における経験談などを交えて税の仕組みや役割、今後予想される税を取り巻く環境の変化について講義し、「税の大切さ、税のあり方を考えてほしい。」と主張された。

地球の命つないでいこう in 四日市

2009年9月5日、四日市大学研究機構などの主催で、生物多様性について考えるイベント「地球の命つないでいこう in 四日市」が開催され、本学環境情報学部の学生がシンポジウムや子供向け環境教育イベントに参加した。これは来年10月に名古屋で開かれる生物多様性条約第10回締約国会議(COOP10)に向け、生物多様性への関心を高めてもらおうと開催されたもので、約230人が参加した。

学生たちが行ったのは「環境紙芝居」。祖父の田舎を訪ねた男の子が、河童に出会って一緒に遊ぶうちに川の汚れや変化を知るというストーリーだ。紙芝居は実写版で、学生たち自身が河童の着ぐるみを着て演技をしたものを撮影し、その静止画像をパワーポイントで順番に映す。ストーリーも撮影もすべて学生自身で行った熱意の結晶だ。集まった約30名の子供たちは楽しく環境を学ぶことができたようだ。

サマースクール

2009年8月5日から7日までの3日間、環境情報学部でサマースクールを実施した。プログラムは昨年と同様「高松干潟を科学する」で、地元に残された貴重な干潟で自然環境を学ぶとともに、埋め立てやゴミ投棄などの人間社会と干潟の関わりなどについて学ぶものである。今年は3高校(愛知県立海翔高校、三重県立久居農林高校、三重県立四日市農芸高校)から参加があり、高校教員を含めて全体で26名の参加者となった。



初日は全員が高松干潟に出て生物調査を行い、二枚貝やカニなど全部で26種類の生物を採取した。また、翌日の化学分析の試料とするための採水と採泥、さらに、干潟での清掃体験を実施した。

2日目は、水谷いずみ氏(「高松干潟を守ろう会」)から「高松干潟の現状について」という講義を受け、その後、実験棟にて前日の水質と底質試料を化学分析して、有機物量や窒素やリンなどの栄養塩量を計測した。また顕微鏡にてプランクトンの種類の同定を行った。

最終日は、コンピュータ演習室で観測したデータを整理し、その結果と考察を発表資料にまとめてグループに分かれて発表を行った。科学的な調査結果を得て、「河口から沖に向かって、生物相が変わっていくことがよくわかった」「干潟にこれほど貝がいるとは思わなかった」など、新たな知識を得た高校生たちの感動が伝わってくる感想が聞かれた。

参加者には播磨良紀環境情報学部長から修了証が渡されてスクールは終了した。今年のスクールは(財)日本科学技術振興機構のサイエンス・パートナーシップ・プロジェクトに採択されている。

ひらめき☆ときめきサイエンス

2009年8月7日「日本の数学・西洋の数学～高次方程式の解法をめぐって～」が開催された。環境情報学部の小川 東教授が講師を務め「江戸時代の方程式の数値解法」を、上野健爾四日市大学関孝和数学研究所所長が「ヨーロッパにおける方程式の解法の歴史」を解説し、実際に参加者がその解法を探った。

上野所長は、日本数学協会会長、京都大学名誉教授であり、『学力があぶない』(大野晋共著)でも有名な、日本を代表する数学者である。

全日本ソフトテニス総合選手権大会ペア優勝



2009年7月11日から12日、四日市ドームにおいて、平成21年度全日本ソフトテニス総合選手権大会三重県予選会大会が開催され、長岡渉さん(総合政策学科2年)・清水仁詞さん(総合政策学科2年)ペアが見事優勝を飾った。2名は、10月16日から18日まで兵庫県三木市にて開催される「全日本ソフトテニス総合選手権大会」に出場する。

《今までに発行された Pick Up Topics が、ホームページからご覧いただけます》
<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/guidance/09.html>

又は 四日市大学トップ→大学案内→ピックアップ・トピックス